

川床睦夫氏を偲ぶ

長谷川 奏

Obituary for Dr. Mutsuo Kawatoko (1948–2018)

So HASEGAWA

2018年1月21日、イスラーム考古学研究所長の川床睦夫氏が逝去された（享年69歳）。川床氏は、この数年病床におられたが、縁の深い研究仲間の葬儀などの折には、お姿をお見かけすることもあっただけに、残念な思いはひとしおである。川床氏が早稲田大学の大学院（東洋史）におられた頃から親交をお持ちであった先生方が考古学界の重鎮としておられる中で、また川床氏と共に厳しいフィールドの数々を踏破されてきた研究メンバーの方々が活躍されている中で、学生隊員の一人に過ぎなかった筆者が追悼文を書くことは必ずしも適切では無いが、ここではあくまでも、発掘調査を始められた草創期の川床氏のエネルギーの中で学ばせて頂いた嘗ての若手隊員の思い出として記させて頂きたいと思う。

川床氏は、日本におけるイスラーム考古学の先駆者であった。中東の考古学自体は、1956年に始まる東京大学イラク・イラン調査団に端を発するものとされるが、イスラーム考古学は、その10年後の出光調査団（小山富士男、三上次男団長）によるフスタート（al-Fustāt）遺跡の中国陶磁器分類に始まり、紅海沿岸の港町アイザーブ（‘Aydhab）遺跡調査に繋がる調査がその始まりといわれる。カイロ大学のアフリカ研究所で学ばれた後に、出光美術館に奉職し、1978年から早稲田大学の調査として始まったフスタート遺跡調査を開始され、1981年からは出光美術館との合同調査として位置づけられた川床氏は（1985年からは中近東文化センター）、学史の流れを受け継ぎな



がら発展史を築かれた研究者でもあった。川床氏が手掛けたフィールドは、その後、エジプトでは、シナイ半島のトゥール（al-Ṭūr）遺跡（1986年～）とラーヤ（Rāya）遺跡（1997年～）、スーダンではバーディウ（Bādi’）遺跡調査（1987年～）へと進められていく。

川床氏の研究の特色は、まず第一に、吉村作治氏（現・東日本国際大学学長）がメソポタミア考古学を専門としていた川村喜一氏（早稲田大学文学部西洋史学科教授）らと共に、1971年よりルクソール（テーベ）の南方マルカタ（Malqata）南遺跡で始めた早稲田大学エジプト考古学調査の中核隊員として参加された折の蓄積に深く関わると思われる。このマルカタ南遺跡調査は、もともと文明形成期（先王朝時代）の史的展開の解明が主題となったものであったが、ローマ時代のイシス神殿の周域住居址の調査から始まり、同神殿の付属するビザンツ時代の井戸址、新王国時代（特にアメンホフス3世時代を中心とする）、さらにはトレンチの下層の時代層や周辺の比較調査を加えれば、旧石器時代までの年代軸を扱う総合調査となった。百万年以上という長い時間軸の中で、イスラーム文化層を位置づける川床氏の文明論の視点がここから始まり、やがて「エジプト学」「ギリシア・ローマ古典学」「コプト学」という隣接分野と境を接する「イスラーム考古学」の土台



が築かれていった。

このような経緯があるために、議論の場における川床氏のコメントの中には、マルカタ遺跡調査で長く現地に関わった際に頻繁に訪れたであろうカルナク神殿、王家の谷、貴族の墓等のファラオ建造物の細部に関する比較事例が頻繁に含まれているのが常であり、「私は門外漢だが」という前書きのもとに、あたかも古代学研究者に〈挑むように〉事例提示がなされるのが、川床氏の考古学の魅力でもあった。川床氏はこのようにイスラーム時代に先行するさまざまな考古学情報に触れながらも、イスラーム時代の地域史に深い関心を寄せられ、マルカタ南遺跡の近くのアカールタ村やダバイヤ村でのファラオ時代と変わらない人々の暮らしぶりや、テーベの王朝時代墳墓の略奪でも知られるラスール一族の末裔の話など、古代とイスラームを繋げる話題は極めて豊富であった。こうした背景には、おそらく川床氏が所属していたカイロ大学の地理学研究者がマール・ハムダーン (Gamāl Ḥamdān) の「エジプト的性格論」(エジプトの地で脈々と受け継がれる生活文化論) が現地で大きな話題となり、中東政治学の板垣雄三氏 (東京大学) やアラブ文学の奴田原睦明氏 (東京外国語大学) ら (のちに中東経済史の長沢栄治氏 (東京大学) ら) によって紹介されていく学史があり、それをイスラーム考古学の場で検証する狙いがあったと推測される。

川床氏の考古学分野での業績は、フスタート遺跡の発掘調査報告書 (1994年) を代表として、イスラーム陶器・中国陶磁器・ランプ等の生活雑器全般にわたるが、特にファラオの時代からイスラーム時代までの生活文化の基幹を占めていた土器論は、圧倒的な深みを持つものであっ

た。しかし、実は第二に強調したい点として、古代からイスラームにわたっての知の系譜を紐解く手がかりとして傾倒しておられたのが、建築史の領域であったことである。そのみなもとはおそらく、これも早稲田大学のマルカタ南調査であり、古代建築を専門とされる渡辺保忠氏 (早稲田大学建築史学科教授) との触れ合いであったと思われる。新王国時代の祭祀建造物と思われる遺構を、ほんの僅かな手掛かりから紐解かれていった渡辺教授のいわば〈神業〉に触れたときの感動を、川床氏はよく後輩の前で振り返っておられた。目の前にある古代の知を建築から解き明かす魅力は、やがて現地に長期滞在して、早稲田大学の現地研究施設 (ワセダハウス) の建設指揮をされる経験 (1976年) をもとに大きく蓄積され、それがやがて、木島安史氏 (熊本大学教授、後に千葉大学教授) らと共に、フスタート遺跡の建築遺構と中世のカイロを繋げる都市研究に繋がっていったのであろう。

そして第三に川床氏の考古学を最大限特徴づけるものに、遺跡調査を個別の遺跡研究に閉じ込めず、地域が有機的に強い結びつきをもつものとして捉えた総合調査として組織していった点がある。川床氏が考古学という枠にとらわれず、広い中東学の中で研究ネットワークを広げていった足跡は、中近東文化センター研究会報告の題のもとに、第1巻 (1980年) から第10巻 (1989年) のシリーズにみられる。このうちの第1巻は、フスタート研究報告会 (講演会) の記録を収録したものであるが、以後、「アラブは何か」「東西交渉史におけるムスリム商業」「アラブとアジャム」「イスラームの宗教意識とその周辺」「中近東・イスラーム社会における族的結合」「巡礼 Part I, Part II」



「十字軍」「イスラームとモンゴル」を主題としたシンポジウムの中で、歴史学・人類学・宗教学等を総合した議論が展開していった。こうした先駆的な業績をベースに、イスラーム学という厚みをもった研究の繋がりの中で、川床氏は発掘調査ばかりでなく、サウジアラビア、イエメン、オマーン等でも、ルート調査、岩壁碑文調査、古文書調査等を組織していくことになる。

最後に筆者自身の目に鮮やかに残る川床氏の像を記してみたい。川床氏が初めて手掛けたフスタート遺跡の発掘調査は、いま思い返しても、凄まじいエネルギーに満ちた日々であった。遺跡は都市のスラムに囲まれており、屠殺場の血の匂い、窯からだされるもうもうとした黒煙、燃料の砂糖黍の腐敗臭が体にまとわりついた。村の安息を乱す闖入者と思われたか、敵意に満ちたスラムの子供たちからは、金属缶の蓋が手裏剣のように測量平板めがけて飛んできた。発掘調査は毎日早朝から始まり、日没近くまで続けられた。川床氏は現場主任でありながら、自らランドクルーザーの運転手を引き受け、日が落ちてからも、調査用具の調達や書籍購入に出向いた。酒席でも、川床氏は学問を論じる議論を緩めることはなく、その気力・体力は驚くべきものであった。川床氏は、日本の考古学や世界のさまざまな考古学を志す若者たちからなる草創期のイスラーム考古学の現場で、モノのかたちやうわべの装飾からだけ論



じることなく、文化の基層から変化を論じる議論の場を日常生活の中から実践されようとしていたと思われ、そのためには、あたかも無秩序な幕末の浪士隊をまとめる〈鬼局長〉を務めることを意識されていたふしがある。試行錯誤の連続ながらも、イスラーム考古学を発進されたばかりの鋭気に満ちた日々に触れさせて頂いたことにひたすら感謝し、ここにご冥福をお祈りする次第である。

長谷川 奏

So HASEGAWA

早稲田大学総合研究機構

Comprehensive Research Organization,

Waseda University

